



道南の果樹

北海道農試渡島支場

白金茂

北海道開発の出発点であつた道南は、また北海道における果樹園芸の発祥地でもあつた。

明治元年、箱館在往の、一独乙商人、エル・ガルトネルが七重近傍に、三〇〇万坪を借受けて、各種農作物を導入して、洋式農法を試みた記録が残されているが、現在もなお「ガルトネル」と称するぶどう（ブラック・ハムブルグ）が残されているところから、その際、西洋果樹の苗木も若干導入されたものと考えられる。

その後、明治三年に至り、ガルトネルより撤回した土地に、開墾場を設置し、明治六年、七重開墾場と命名、梅、桃、ぶどう、りんご、なし等の果樹苗二、〇〇〇本を導入し、果樹の試験調査、並びに、果樹苗木の育成配布を行なつた。

しかし、爾來九十有余年を経た現在、道南果樹の栽培状況は、いささか、その歴史にそぐわないところがないでもない。

その原因としては、後述する如き、幾多の特殊事情は認められるが、なお、道南の気候風土の特徴を擷んで、適品種、適栽培法に徹底すれば、興味ある特殊果樹地帯と

しての発展も可能であり、また、今後ますます経営面積の減少が予想される道南農業として集約反応の大きい、果樹園芸の普及は、必須の要件でもあるので、若輩、いまだ、道南の果樹を論ずるに未だしの感が深い、求められるままに私見を綴ることとした。

気 候

道南の気候の特異点は、第一に、道南といえ、すぐ暖いといふ感じを持ちながら、一表に示す通り

第一表 月別平均気温表

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年平均
青森	(一)一八	(一)一九	〇二	七・三	三三	三三	三三	三三	二七	五六	〇〇	九四	
函館	(一)三三	(一)三四	(一)四五	六四	二三	二五	一九	三四	六九	二〇	四五	(一)一六	八二
札幌	(一)四三	(一)四四	(一)四四	六・三	三〇	二九	二二	一〇	三三	(一)二七	七九		

(本邦累年気候表、一九四六年～一九五三年の十年平均)

第二表 月別降雨量

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年平均
青森	二五	三三	二〇	二五	四三	五五	二九	二五	三三	三三	二五	二五	三三
函館	五五	五五	五五	五五	五五	五五	五五	五五	五五	五五	五五	五五	五五
札幌	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三

(本邦累年気候表、一九四六年～一九五三年の十年平均)

年間の平均気温や、冬期間は高温でも、肝心の五月から九月に至る農耕期間が、道央部より低温に経過するということである。

第二には、俗に「ヤマセ」&称する東偏風が、六、七月に吹くことである。

この「ヤマセ」は、内浦湾からの、海霧の延長で、風力こそ強くないが、日照を遮り、低温と多湿を伴うので、果樹の生育にいろいろな障害をきたし、病害を誘発、助長するところが大きいことである。

第三には、二表に示す通り、冬季節の降雪量は少ないが、農耕期間中の降水量が多く、しかもこの降雨が、豪雨性でないために、日照の少ないことに結びつくので、生育阻害と、病害誘発を伴うことである。

以上、不適な点ばかりを拾いあげてきたが、好適な点も少なくない。

第一には、積雪が少ないので、枝折れや、裂開等の雪害の心配が少ないので、整枝剪定に利点が多いことである。

第二には、冬期間の気温が高いので、凍

害の心配がないことである。

特に、ぶどうでは、棚降しの必要がないので、府県に準じた整枝ができる。

第三には、秋が暖かく長いので、秋に発育肥大の著しい、長十郎梨等に、優品が生産される。

土 地

道南は、羊蹄山を始め、今なお、噴煙をあげる駒ヶ岳、有珠岳等による、火山噴出物が広く管内を覆い、地力の劣る墾土が広く分布している。

然るに、耕土の狭隘な道南では、果樹が平坦な沖積層に存在、発展することは、まず不可能で、現在の果樹地帯も、また、今後の果樹増植予定地帯も、火山灰系土壌（墾土を含む）におかれるのが道南果樹の宿命と考へる。

従つて、この軽鬆な土壌を、風による土砂の飛散、降雨による流亡から守り、養分保全、侵蝕防止、乾湿調査等のため、草生敷草栽培等の対策が必要になつてくる。

栽培の現況

道南の果樹は、りんご、なし、ぶどうの三種が一戸の果樹経営の中で、それぞれ、同程度の主体性を主張し合つて混在しているのが特異な点である。

和梨は、長十郎を主体にして、身不知、八雲、祇園、久保、菊水等、洋梨は、パレットを主体にして、日面紅、ブランドー、ワイン、プレコース等が栽培されている。整枝は、和洋梨共ほとんどが棚仕立て、

古樹に、長幹東型整枝が多く、主枝の下垂、樹形の乱雑が目立つが、若樹では、短幹関西型に改良されつつある。

栽植距離は、和梨で四畝に四畝、洋梨で六畝に六畝では、密植強剪定の障害を免れないが、間伐は、その割に普及していない。主な病害虫としては、病気では黒星病、黒斑病、洋梨胴枯病等が問題になる。

黒星病は、専らポルドウ液に依存防除しているが、残効性の点で水銀製剤、有機硫黄剤、銅水銀製剤等では、五、六月の発生盛期の乗切りに不安がある。

しかし、六月下旬以降にポルドウ液が果面に附着すると、赤梨では果面が汚染されるので、散布薬液量、散布方法に工夫し、袋も十切以上の大袋を用い、被袋方法にも注意して、薬液の果面接触を防いでいる。

汚染は、王銅、クポイド等の銅製剤では、黒色、石灰液では、褐色、水銀製剤では赤褐色を呈するので、ポルドウ液では黒褐色を呈する。

もつとも、六月下旬以降を有機硫黄剤にすれば、汚染の心配は解消するが、残効性の点で、薬剤散布の回数を増さねばならぬことと、薬剤価格の点で、中々普及し難

第三表 ポルドウ液散布時期と果面の汚染

散布月日	六三	六三	六三	七三	七三	七三	八三	八三	八三	九三	九三	〇三	〇三	〇三
汚染認定日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(供試品種 長十郎 昭和二十八年 渡島農場)

第四表 マダラメイガによる芽の喰害

調査月日	六五	七五	七五	八五	八五	九五	九五	九五	九五	〇五	〇五	〇五	〇五	〇五
被害率%	〇	〇	〇	五	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

(供試品種 身不知 昭和二十六年 渡島農場)

い。

しかし、最近生産費組低減の趣旨に沿った時のような二度掛(果袋)は全く姿を消し、さらに一部では既に、小袋掛だけという栽培者も出てきているので、この果面汚染の問題は速からず解消するものと考えられる。

害虫では、ナシヒメシンクイガ、マダラメイガ、アカダニ、ナシノワタムシ、ナシハモグリダニ、ナシミバチ、カイガラムシ、ナシキシラミ、アブラムシ類、ナシスカシクロハ等が棲息している。

マダラメイガは、四表に示す通り、七月末から八月末に至る一カ月くらいの期間に、新芽を喰害するので、この期間に、三回くらい接触剤を散布すれば防除できる。ナシ、ノワタムシは、まだ、経過習性が詳らかでないが、落花後に新葉に寄生し、夏期に入ると飛去するので、この期間の薬剤散布には接触剤を加用する。

赤ダニは、オウトウハダニが、樹幹粗皮間隙に成虫越冬し、春から活動し、夏季に入ると、グイズハダニと、僅かながらリンゴハダニが混棲するようになる。各種殺ダニ剤を使用しているが、今少し、

早期防除の必要がある。

ナシヒメシンクイムシは、道南では、五月下旬から六月上旬に成虫が羽化し、九月上旬までは、成虫を認めるので、小袋掛だけの果実や破袋果は、薬剤防除を徹底しなければかなりの被害を蒙る。

道南の和梨の八割を占める長十郎は、十月末から十一月初めにかけて収穫されるが、府県或は道内への管外移出と、貯蔵に問題がある。

貯蔵は、三、四月までできるし、府県では対照が晩三吉、道内では、同種か身不知で一応問題なく、既に、移出もかなり行われ好評裡に迎えられている模様であるが、時期的に柿、みかん、りんご等、梨以外の果実との競合が不可避な点に問題が残る。

然し、長十郎は、りんご、ぶどうに比べて、生産が安定し、全国的な和梨の端境期に出せること等からも今後は、品質の統一や共同出荷等により、全国的に移出し、販売途を拡げることが肝心と考える。

次に、道南のりんごは、デリシヤスとゴールデンデリシヤスに主体をおくべきと考える。

デリシヤスは、日本人の嗜好に適した、りんごとして、急速な消費の増加を見、また豊産、無袋可能な利点もあつて、その増殖が著しいが、府県産デリシヤスは、貯蔵に限度があり、道央以北よりは、優品が生産できる環境にあるので、この間隙を掴み一月以降に出荷すれば、全国的にデリシヤス特産地としての名声を博することも夢ではない。

ゴールデンデリシヤスは、耕地狭少の道南として集約度を高めるために必要である。

幸い、優品の生産できる環境にあるのだから、年内消費、高級品種として、完全管理の可能な範囲で、栽培すべき品種である。

栽植距離は、八畝に八畝が多く、密植、強剪定の障害は著しいが、間伐、疎植は中々普及されない。

病害虫で問題になるのは、病気では、モニリヤ病、早期落葉病、害虫では、シンクイムシ類、アカダニ、線虫等である。

シンクイムシは、モモンクイと、ナシヒメシンクイが混棲するので、無袋では、薬剤種類、散布時期に注意が必要である。アカダニは、リンゴハダニと、グイズハダニが混棲するが、発生時期は七月以降で比較的晚い。

線虫は、極く最近、被害が報告されたものであるが、新植の幼木等に著しい傾向があるようである。

モニリヤ病は、近年、被害が著しいが、防除暦を厳守することはもちろんのこと、開花中の硫黄合剤散布も併行したい。

元来、りんごでは一番花を残して、それ以外の花は摘み落すのであるから、一割前後開花の日から算えて、五日目と、八日目の二回、硫黄合剤・五度液を散布することにより、一番花には全く影響なく、五表に示す通り、実腐水株腐れを防除できる。早期落葉病は、国光、デリシヤス等に著しい傾向がある。